新型コロナ感染症病棟における Freestyle リブレを用いた血糖測定の有用性と問題点

◎村上 智美[1)]、堀 瑞記[1)]、植田 祐介[1)]、迫 欣二[1)]
JA 愛知厚生連 知多厚生病院[1)]

【はじめに】
当院は愛知県の知多半島南部に位置し、診療科 25 科、病床数 199 床、1 日平均外来患者数約 532 名の中規模病院である。また、感染症病棟 10 床を有する第二種感染症指定医療機関であり半島南部の新型コロナウィルス患者の検査、治療を支え、これまでにのべ 272 名の新型コロナウィルス感染患者の受け入れを行ってきた。中には糖尿病の基礎疾患がある患者や、加えてステロイド治療を行う患者など血糖管理を必要とする患者もみられたが、ピーク時には手狭な病室内で予防衣を着て毎食前の血糖測定を行うことが大変であった。今回感染症病棟内における血糖測定に持続血糖測定装置を導入することで業務の効率化、および医療安全面に大きな効果が得られたので報告する。
【方法】
使用機器は、Freestyle リブレ（アボット社　以下リブレ）で患者の腕にセンサーを装着し、感染病棟専用のリーダーを患者ごとに用意した。患者は、食事前、就寝前の最低 4 回はリーダーをスキャンし、血糖値の読み取りを行い、看護師への報告をお願いした。自身で読み取りのできない患者は看護師がスキャンし、カルテに記載した。
【まとめ】
感染症病棟に入室するには予防衣、N95 マスク、フェイスシールドが必須であるが、視界も悪く、手袋を重ねて装着するため、指先の動きを制限された状況の中で、小さな針を刺してセンサーに血液を点着する行為は大変であり、医療安全的にも問題があると言わざるを得ない。その状況を改善すべく、リブレを装着して血糖測定を行うことで看護師の業務負担軽減に大きな効果が得られることが明らかとなった。厚生労働省が示した臨床検査技師に対するタスクシフト/シェア業務のなかにも持続血糖測定装置の装着が明文化されており、臨床検査技師の業務として正式に認められた。今後さらにリブレを用いた持続血糖測定の活用だけでなく、タスクシフト/シェアで広がった業務拡大を通じて積極的にアイデアを提案し、院内スタッフの業務軽減と患者負担軽減を追求していきたい。
連絡先　0569-82-0395（内 6717）